

# ともに近代化を目指そう…… 明治人の志が 台湾に奇跡を呼んだ

五年前の東日本大震災、今年二月の台湾南部地震に際し、日本と台湾は双方が  
官民ともに即座に動き、救援や心のこもった見舞いで、互いに助け合い励まし合った。  
そんな両国の素晴らしい関係の源は、明治時代に遡る。  
第四代台湾総督・児玉源太郎をはじめとする、  
志を抱いた明治人の台湾への尽力こそが契機であった。  
かつて日本人は、未開の地・台湾にどう向き合ったのか。

## 驚くべき日本時代の教育

私は昭和二十二年（一九四七）生まれですが、幼い頃の台湾との「出会い」をよく覚えています。

小学生の時のある夏、甲子園で行なわれていた全国高等学校野球選手権大会をテレビで観ていて、過去の準優勝校の中に「嘉義農林学校」の名を発見しました。同校が準優勝したのは戦前の昭和六年（一

九三二）のことですが、嘉義とは聞き慣れない地名だと思い調べてみると、台湾の学校だとわかりました。同校野球部は台湾にわたった松山商業出身の近藤兵太郎が監督を務めており、映画「KANO」（二〇一四年台湾公開、翌二〇一五年日本公開）でも描かれたので、記憶に新しい方も多かもしれません。甲子園準優勝の時のレギュラーは、日本人が三人、台湾人（漢人）が二人、原住民族高砂族が四人だったといえます。当時の選手は、差別は一つもなかったと言い、「正しい野球」を伝えてくれたと近藤監督を懐かしく回顧しています。

また同じ頃、テレビ番組で、「戦前の日本で一番高い山はどこか」というクイズが出題されていました。これに「富士山」と解答したら誤りです。私も小学生なりに知恵を絞って、「戦前には日本領だった朝鮮半島や台湾、もしくは千島列島や樺太のどこかの山かな」とまでは想像しましたが、答えは台湾の新高山（いまの玉山）でした。昭和十六年（一九四二）十二月の真珠湾攻撃の作戦実行を命令する「ニイタカヤマノボレ一二〇八」でも知られる名山です。

私はこうした幼い頃の体験を通じて、やがて日本統治下の台湾について少しずつ知識をもつようになりました。驚いたのは、戦前に台北帝国大学、及び台北高等学校が設立されていたことです。例えば、私の故郷である北海道には、帝国大学はありませんが旧制高校はなく、帝大予科があるのみでした。一方で台北には帝国大学はもちろん、旧制高校までも設けられており、他にも工業、商業、農業、医学でも高等教育の専門学校がつけられました。これだけを見ても北海道レベルよりも恵まれていたかもしれません。

## 山内昌之

Yamanouchi Masayuki ● 歴史学者

PROFILE 昭和二十二年（一九四七）、札幌市生まれ。

カイロ大学客員助教授、ハーバード大学客員研究員、

東京大学大学院教授などを経て、現在、明治大学特任教授、

東京大学名誉教授。平成十八年、紫綬褒章を受章。

著書「新に学ぶ現在 全三巻」「リターニング

胆力と大局観」中東国際関係史研究「歴史とは何か

など著書多数。近著に「中東複合危機から

第三次世界大戦へ（PHP新書）」「新・地政学

（佐藤優氏との共著、中公新書ラクレ）がある。

背景：台湾の最高峰・玉山。日本では「新高山」の名で知られる（写真提供：eiyun/Shutterstock.com）

かつて日本は、朝鮮半島のソウルにも京城帝国大学を設立しました。植民地とは基本的に、支配者が被支配者から「搾取」することを目的として統治が行なわれます。そうである以上、植民地に国内と同様、もしくはそれ以上の充実した教育機関を置くことなど考えにくいことでした。しかも日本人は貧富や出身に関係なく、分け隔てなく台湾人の教育にあたったといえます。

また、ここで私たちは、現在の台湾の姿をイメージしてはなりません。日本が統治を開始したのは、日清戦争勝利後の明治二十八年（一八九五）のことで、当時はまだ系統だった教育は行なわれていませんでした。そんな清国のいう「化外の地」に、日本は内地と遜色のない教育体制を整えたのです。

私自身、台湾の李登輝元総統から「日本統治がなければ、我々は物事を知ったり学んだりする」という『向上心』を知らずにいたままだったでしょう」という趣旨のお話をお聞きしたことがあります。もちろん

ん李元総統に限らず、陳水扁元総統の相談役、許文龍氏なども同様の趣旨を発言しています。結果、五年前の東日本大震災、そして今年二月の台湾南部地震の際には、双方の官民ともに即座に救援や見舞いに動くなど、日本と台湾は今に至るまで、素晴らしい関係を築いているのです。

### 決して「搾取」だけでなかった統治

それにしても、なぜ明治日本は台湾を「搾取」だけの対象として捉えなかったのでしょうか。明治人にとって、台湾統治とはどんな意味を持っていたのか……。この点を紐解くには台湾統治、とりわけ今に続く日台関係の礎を築いた第四代台湾総督・児玉源太郎に代表される明治人の姿に迫る必要があります。

児玉源太郎が台湾総督に就任したのは、明治三十一年（一八九八）二月のことです。それまで樺山資紀、桂太郎、乃木希典が総督を務めていましたが、いずれも統治がうまくいかず、児玉に白羽の矢が立ちました。

児玉の総督就任以降、台湾は劇的な変化を遂げます。

教育制度の発展については前述の通りですが、他にもまず特筆すべきが、行政機構の改革です。当時、台湾はあの小さな島に六県六十五署の行政単位がありましたが、児玉は三県四十四署へと簡素化



の導入……。詳細を列挙すると、それだけで紙幅が尽きるほどです。

### 英仏とは異なる「中間型」

このような日本の植民地政策を、果たしてどう評価すべきでしょうか。世界史に鑑みるに、植民地経営には大きく分けて二つのタイプがあります。まず、イギリスが採ったのが「準放任主義」ともいわれる一方、植民地に内地諸県と同様に官吏をじかに派遣する「同化主義」を採ったのが、フランスでした。彼らは現地のインフラ政策をなおざりにして、フランス語とフランス文化を押し付け、同時に略奪政策を行ないました。アルジェリアが代表例であり、現地人はフランスに大いなる憎しみを抱き、一九六二年の独立の際には、実に厳しい争いが繰り広げられました。

これらを踏まえて明治日本の植民地政策に目を向けると、英仏の「中間型」といえるかもしれません。明治日本は現地に多くの日本人を派遣して近代化を行ないましたが、それは、将来的に台湾の人々の「自立」を促すためでもありまし

しました。台北、台中、台南の三区分です。また、病院や医院を設けるなど医療政策にも積極的に取り組みます。実際、日本統治時代の記憶のある台湾の方は、日本人の優しいホームドクター（町医者）の思い出を語る人が多く、医療における日本の貢献が窺えるでしょう。なお、これらはいずれも、児玉の「右腕」である民政長官、後藤新平の存在抜きには語れません。

また、重要なのが経済政策です。児玉に合理的かつ先見の明があったと感じさせるのは、殖産局長に新渡戸稲造を抜擢した点でしょう。新渡戸は農業経済、植民地経済の専門家で、後に国際連盟の事務次長となる「国際人」です。新渡戸のもとで特にサトウキビの生産量を向上させた台湾は、日本国内でいえば沖縄と並ぶ「砂糖生産大国」へ変貌を遂げました。

その他にも、物資輸送のための鉄道や港湾の整備、度量衡システムの平準化、下水道整備などによる衛生状態の改善、そして戸籍制度

森林資源を運ぶために1906年に建設が始まった阿里山森林鉄道は今も運行している(写真提供:JTBフォト)



た。穿った見方として、「台湾からより多くの利益を搾取するために、近代化を行なったのではないか」という声もあります。が、もし日本にそうした下心があり、一方的な搾取の気配を見せていたならば、間違いなくアルジェリアのように「怨み」を晴らすための解放戦争や日本人虐殺が起きたはず。しかし、台湾、そして朝鮮半島においてすら、ついに大規模な叛乱は起きませんでした。誇り高き台湾の中国人や朝鮮人さえ蜂起しなかったことを考えれば、日本統治の「真実」が窺えます。

私が感じるのは、児玉源太郎ほど「先が見えた」男ならば、欧米列強が経験したように植民地は永続的なものでなく、いず

れ宗主国から分離独立せざるを得ないとわかっていたのではないかと、ということ。ならば、後世に至ってもポジティブな面が記憶されるような統治にすべきである——そうした「百年の大計」を、児玉は作爲的かつ意図的ではなく、ごく自然に考えることができたと思うのです。余人には代えがたい現実主義者だったといってもよいでしょう。しかも児玉は、内務大臣を兼務していました。当時の内務省はひと昔前でいうところの自治省、厚生省、建設省、警察庁など



台湾名物・パイナップルの農場（『日本地理大系』より、写真提供：片倉佳史氏、以下同）

を併せた役割を担っています。大臣としての予算への目配りの点でも、行政感覚を備えた児玉が台湾総督であったことは、日台にとって実に幸福な展開だったのです。

### 明治人の「志」とは

単なる搾取の対象ではなく、あくまで「本土の一部」「内地の延長」——。それが、台湾の植民地経営にあたった児玉ら明治人の感覚でした。そうした感覚、感性は、明治の日本人の多くが胸に宿していた「志」に拠るものでしょう。

維新を経て明治の世が到来すると、身分に関係なく、有能な人物が活躍できる時代となりました。児玉、後藤、新渡戸はその代表例と言うべき人物です。児玉は長州支藩・徳山藩の下級武士出身で、幼くして父親を失い、義兄が惨殺されたため貧しい育ち方をしています。後藤の家は伊達家の陪々臣で、やがて帰農しました。新渡戸も盛岡藩の出身で、維新後には「賊」と罵られました。彼らは、心の「痛み」や「貧しさ」に耐えながら、激動の幕末動乱を経てきた男たちです。我々の想像を絶するような苦しい体験が、彼らの精神を鍛え、「志」を高めた部分も大いにあったことでしょう。彼

らの志とはすなわち、日本を欧米列強の脅威に屈しない、近代国家へと生まれ変わらせることでした。そして台湾についても、日本の統治下に入ったのであれば、分け隔てなく一緒に近代化を目指していくのは、しごく当然のこと——。それが明治人の感覚だったのです。また古来、日本人には「惻隠の情」が備わっています。困っている人がいれば、何の見返りも求めずに相手を助けるのは当たり前のことであり、武士道の「敗者への共感、弱者への愛情」に結びつくものでした。明治人が「未開」の台湾の地に降り立った時、「台湾の人々の暮らしを日本人と同等のものに引き上げよう」と考えたのは、まさに根底に惻隠の情、武士道の心があったからなのです。彼らの心の裡に現代的な意味での「搾取」などという言葉が浮かぶ余地は、些かもなかったでしょう。

そして、忘れてはならないのが、台湾人がそうした明治人の志に、大いに応える人々であった点でしょう。

各種のインターネット資料でも、次のように多くの逸話を知ることができます。明治三十九年（一九〇六）、児玉は五十五歳でこの世を去りました。その後、神奈川県の江ノ島に児玉神社を建てようという



漢民族が渡来する以前から台湾に暮らす原住民（サアロア族）の人々

話が持ち上がり、基金を募ったところ、十一万円の予算に対して、一説には三千円しか集まりませんでした。ところが、この話が台湾に伝わると、僅か二週間で残りの額が集まったというのです。また戦後、中国国民党が台湾に来た時、台湾人は博物館に建っていた児玉や後藤の銅像を地下に隠しました。これは心の底から尊敬、敬愛の念を抱いていなければできない行動です。児玉ら明治人の功績の大きさとともに、台湾の人々の心意気が沁みる逸話ではないでしょうか。

「我々の国を、これほどまでに良くしてくれて、教育やモラルなど色々なものを授けてくれた日本人、台湾発展の基礎を築いてくれた日本人は、今どこへ行ってしまうのでしょうか」

時おり、台湾の方々から今の日本人に向けられる言葉です。彼らは、もしかしたら我々以上に「日本人の何たるか」を弁えているのかもしれませんが、さらにいえば、この言葉の裏側には日本への愛情と信頼感が込められていると感じずにはいられません。そんな言葉に込めるためには、現在の日本と台湾の「絆」を生み出した明治人の姿に想いを馳せ、日本人として歴史にプラスの貢献を果たした事実を改めて銘記する必要があるでしょう。